

## ポール・グリモーとのやっやの出会い

本学図書館には、いわゆる「アート・アニメーション」のDVDやVHSビデオテープのソフトが相当数所蔵してある。これは十数年に渡ってコツコツと図書館に購入していただいた結果で、今や広島県内でも有数の資料を誇っているのではないだろうか。最近も、フランスのアニメーション作家ポール・グリモーの作品集が新しく配架された。さっそく視聴した。まず、彼の代表作である長編の「王と鳥」だ。この作品（王と鳥）ではなく「やぶにらみの暴君」の方であるが）は、アニメーションをよく知る人々から非常に高く評価されていることは以前から知っていた。しかしこの作品はセル画アニメーションという技法で作られている。私の好むところは、パペットやカットアウトやクレイその他の素材を駆使した、どこか造形表現の側面を強く持つ作品で、これまでセル画アニメーションに対してあまり良いイメージを持ってこなかった。なぜなら日本製テレビアニメ草創期の洗礼をモロに受けた世代として「セル画アニメーション商業的大衆娯楽手抜きアニメ」という刷り込みが深くなされており、簡単にそのイメージが払拭できないからだ。またこれも名作の誉れ高い「雪の女王」を観た時も、確かに優れた作品ではあるが、あくまで東映動画ファン目線によるものなんだろうという認識しかできず、さらには出版物などで見ると「王と鳥」のポスターの絵柄からも、いわゆる名作童話調の子供向けアニメーションという印象を、どうしても拭い去ることができなかった。しかしポール・グリモーは、そんな私のセル画アニメーションに対する偏見を、あっさりとして覆し、静かだが豊かな感銘と幸福を与えてくれた。

まず、この作品全体を包み込んでいるなんとも言えない静かさだ。いや、もちろん音楽や効果音はじゅっぶん鳴っている。しかしセリフも必要最小限で、一切無音のシーンが少なからず存在し、むしろその無音によって雄弁に語っている。ハリウッド映画やバラエティ番組やCMやコンビニのジャンクフードやインスタント食品みたいに始終鳴り続け、無理矢理目や耳をこじ開けようとするような野蛮で下品な「やかましき」や「押し付けがましき」がない。この、決して迎合しようとしていないピッチと背筋を伸ばしたポール・グリモーの姿勢がいかに心地良いのだ。SFまがいの王様の生活風習から、やがて展開するドタバタ追いかっこ、さらには鋼鉄の口ポットまで登場するのに、決して通俗に墮すことを許さず、毅然としたまま、最後には少し苦い余韻さえ残しながら静かに終わる。また「動き」がとてもやわらかく優雅だ。それはフルアニメーションの特質ではあるとしても、例えば嫌われ者の王様でさえ品良く優雅に威張っているし、猛然と走る姿でさえ、どこかしつとりと上品だ。色彩もまたやわらかく美しく、デイズニー流極彩色とは無縁であることは言うまでもない。ところで本作に関しては、ポール・グリモーの意に反して、未完成のまま発表された「やぶにらみの暴君」の方が、後の本人のリライアント版「王と鳥」より結果として優れていた、という批評をよく目にする。それは決してありえないことではないだろう。確かにライオンの描写部分などおきらかに異なる絵柄が混在し、変だなと感じる箇所もあった。物語の焦点が羊飼いの娘と煙突掃除人の悲恋から、王と鳥の権力争へ移り、構造が単純化してしまっただなども指摘される。しかしこの「王と鳥」でも、じゅうぶんに優れたアニメーションの魅力を感じることはできた。

次に初期からの短編集の「ターニング・テーブル」だ。この作品集はポール・グリモーが生み出したキャラクター達が、グリモーその人と会話しながら彼の短編集と一緒に観ていくという趣向。メランコリックな音楽のせいもあるんだらうけれど、ポール・グリモーのアニメーションに対する溢れんばかりの愛情がひしひしと感じられ、それが嬉しくて涙が出そうになる。キャラクター達は、とても静かに行動よくアニメーションを観ている。グリモーもキャラクター達も、お互い言葉少なだ。ハッピーエンドではない作品に対してキャラクターは「あの男ひどいやつだ、嫌な気分だよ」と率直に言う。それを聞いてグリモーも「そうだね、では気分を変えよう」とだけ言う。二人ともアニメーションが、ただの甘いだけのお菓子ではないことを知っているからだ。ポール・グリモーも、もちろんデイズニーからの影響は少なくないだろう。しかし両者にはどこか決定的に違う何かを感じる。デイズニーが、キャラクターをキャラクター商品化してビジネスとして成功していたのに対して、ポール・グリモーは、決してそうせず、娯楽的快楽の追求のみで終わる事を潔しとせず、デイズニーが失ってしまった何かを意地でも守り通そうとしたのだ。アンケート流行の世の中で、お客様望みがままに品物を提供することが、決してそれが本当にものを生み出すことではないんだよと静かに語りかけているかのようではないか。ポール・グリモーのキャラクターはだから、鑑賞者に対して適度な距離を保ち、決して上目遣いせず、どこか凛としている。最後の、それこそ宝石のような作品「小さな兵士」が終わると、キャラクター達はカーテンコールもなしに黙って帰っていくのだった。